



WAREHOUSE

『130313-ウエアハウス』text1

〔登場人物〕

○サトウトオル⇨田口トモロヲ

○トミヤマシヨウジ⇨ヨシダ朝

○ピアニスト⇨前嶋康明

#プロローグ（#エピローグと同じ日）

ピアニストが現れる。

ピアニスト、「ウエアハウスのテーマ」を演奏（M1）する。

（*参考：トニー滝谷／坂本龍一、『100歳の少年と12通の手紙』／前嶋康

明）

イスが2脚置かれている。

片方のイスの上に、『エドワード・オールビー全集第二巻』が置かれている。

トミヤマが現れ、本の置かれていないほうのイスにすわる。

トミヤマ、テキストを開く。

トミヤマ 「カール・ソロモンよ！

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは 僕よりも気が狂っている

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは 非常に調子が変わっている

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは 僕のかあさんの幽霊の真似をしている

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは 十二人の秘書を殺害した

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは この 目に見えない諧謔を笑う

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこで僕たちは 同じようにどえらいタイプライターを打っている大作家である

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこで きみの病状が悪化したとラジオが伝えた
僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ
そこで 頭蓋骨の機能はもはや感覚のウジ虫をうけ入れない
僕はきみと一緒に看護婦の体にじゃれついて
……ユーティカのオールドミス、か……
そこできみは ユーティカのオールドミスの乳房のお茶を飲む
僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ
……!」

サトウがいつのまにか立っている。
サトウ、本をどけてイスにすわる。

演奏が止まる。(M1)

トミヤマ、イヤフォンを外す。

トミヤマ 「ええと、あの……」

サトウ 「It's very hot today , isn't it ?」

トミヤマ 「ええ。」

サトウ 「It's very hot today , isn't it ?」

トミヤマ 「あ……」

サトウ 「It's very hot today , isn't it ?」

トミヤマ 「あゝ It sure is humid, too.」

サトウ 「Is it going to rain this afternoon ?」

トミヤマ 「I doubt it.」

サトウ 「Thank you.」

トミヤマ 「But, we need some rain, don't we ?」

サトウ 「……」

トミヤマ 「Is anything wrong ?」

間。

サトウ 「ああ、もういいんです。I doubt it.まだが決まりですから」

トミヤマ 「日本語できるんですか？」

サトウ 「外人に見えます？」

トミヤマ 「いや、その……もしかしたら、中国の方かなって……」

サトウ 「どうして？」

トミヤマ 「どうしてと言われても……」

サトウ 「私は日本人ですよ」

トミヤマ 「ですよね」

サトウ 「ええ、間違いありません」

トミヤマ 「じゃあ、どうして英語で話しかけられたんですか？」

サトウ 「決まりですから」

トミヤマ 「決まり？」

サトウ 「そう。それに初対面の人に話しかけるときには、天気の話とかが無難でしょ？」

トミヤマ 「それは……でも、どうして英語なんです？」

サトウ 「初対面で、しかもこんな場所だからですよ」

トミヤマ 「はあ」

サトウ 「でね、さっきのが決まりなんです」

トミヤマ 「だから、決まりって何が？」

サトウ 「基本英会話で決まりなんですよ」

トミヤマ 「なるほど。それはわかりましたけど、あれで終わりじゃ会話が続かないじゃないですか」

サトウ 「そうですね」

トミヤマ 「それに、今日は晴れてるし、湿度も高いからいいけど、最初から雨降ってたり、冬で寒

くて、雪が降ってたりしたらどうするんですか？」

サトウ 「そういうときは話しかけません」

トミヤマ 「どうして？」

サトウ 「この型しか知らないから」

トミヤマ 「それじゃ困るでしょう」

サトウ 「ええ、まあ」

トミヤマ 「じゃあ、何も無理に英語で話しかけることないじゃないですか」

サトウ 「でも、日本語で話しかけて無視されでもしたらイヤじゃないですか。だけど英語なら、ああ、この人は英語が苦手なんだなってことにできる。無視されたとは限らないわけですから」

トミヤマ 「でも無視されなかったら、結局は日本語で話すことになるわけでしょ」

サトウ 「ええ、まあ。私もあまり英語は得意じゃないから」

トミヤマ 「だったら、最初から日本語で話しかけてくださいよ」

サトウ 「でも、たとえば日本語で『今日は暑いですね』、って話しかけたら、『そうですね』とかなんとかわわれて、それでおしまいってことになりがちでしょ。で、そのあとはちょっと気不味い沈黙が続いて、どちらかが出ていくことにもなりかねない。それとも音楽でシャットアウト。でも英語で話しかけたことによって、とりあえずここまで会話が進ん

だ、初対面なのに」

トミヤマ 「ええ、まあ、そうですね」

サトウ 「……お気を悪くされました？」

トミヤマ 「え？いや、そんなことは全然」

サトウ 「よかった」

トミヤマ 「変わった人だなあ」

サトウ 「興味あります？」

トミヤマ 「少しは」

サトウ 「ほんとに？」

トミヤマ 「ええ」

サトウ 「うれしいな。あ、まだ名乗っていませんでしたね」

トミヤマ 「ああ、そうですね」

サトウ 「サトウです」

トミヤマ 「トミヤマです」

サトウ 「よろしく」

トミヤマ 「こちらこそ……で、サトウさん、こちらには何か……？」

サトウ 「ここ、教会ですよね」

トミヤマ 「ええ」

サトウ 「散歩をしていたんですが、ちょっと休憩でもさせてもらおうかと思ひまして。ほら、今

日はすごく暑いでしょ」

トミヤマ 「It's very hot today」

サトウ 「そう。教会って、ふつう誰でもウエルカムですよね」

トミヤマ 「ふつうはそうですね。実際、ここは憩いの部屋って名前ですから。でも……」

サトウ 「……勝手に入ってきちゃまずかったですか？」

トミヤマ 「信者さんですか？」

サトウ 「いえ、ちがいます……この教会は信者じゃないと入れないんですか？」

トミヤマ 「そんなことはないと思います。ぼくも信者じゃないですから」

サトウ 「じゃあ？」

トミヤマ 「ご存知ないんですね」

サトウ 「何を？」

トミヤマ 「ここ閉鎖されたんですよ、先週で」

サトウ 「え？」

トミヤマ 「副都心再開発のせいで上の教会が地上げされちゃって、ここも立入禁止なんです、本当

は」

サトウ 「立ち入り禁止？」

トミヤマ 「ええ。許可のない人は入れないことになってるはずですよ」

サトウ 「トミヤマさんは、もしかして地上げ屋さん？」

トミヤマ 「ちがいますよ」

サトウ 「ですよ。じゃあ、都の職員さん？」

トミヤマ 「それもちがいます」

サトウ 「……不法侵入者」

トミヤマ 「ちがいます！」

サトウ 「では？」

トミヤマ 「この再開発反対運動に参加してたんです」

サトウ 「反対運動？」

トミヤマ 「ええ、教会の信者さんたちと一緒にね」

サトウ 「ああ、籠城中？」

トミヤマ 「いえいえ、移転問題はもう決着してるんです。教会は移転に合意したし、来月には取り壊し工事も始まるんですよ。でも、それまでの間は、信者さんは自由に出入りしてもいいってことになってるんです」

サトウ 「そうなんですか」

トミヤマ 「入口もとくに閉鎖されてなかったでしょ」

サトウ 「……それなら立入禁止っていうのは意味がないじゃないですか」

トミヤマ 「そうですね、世の中には無意味なことが多いですよね」

サトウ 「ええ……でも、私は信者じゃないから、やつぱりまずいでしょ」

トミヤマ 「だから、ぼくだって信者じゃありません」

サトウ 「じゃあ？」

トミヤマ 「実はこのサークルに入ってるんです」

サトウ 「サークル？」

トミヤマ 「ええ。今日は活動は休みなんですけど、ぼくは自主練といいますか……」

サトウ 「どんな活動を？」

トミヤマ 「自分の好きな本を暗記してきて、みんなの前で暗唱するんです」

サトウ 「なるほど。だから、なんかブツブツやってたんだ」

トミヤマ 「ええ、まあ」

サトウ 「私はまた、何か危ない人かと思って……」

トミヤマ 「で、英語で話しかけた？」

サトウ 「まあ、そんなところです」

トミヤマ 「おたがいに警戒し合ってたってことですな」

サトウ 「警戒してたんですか？」

トミヤマ 「いや、その……」

サトウ 「べつに怪しい者じゃありません」

トミヤマ 「すみません」

サトウ 「あ、ほら。免許証があります」

演奏。(M2)

トミヤマ 「免許証？」

サトウ 「身分証明書です、いちおう」

トミヤマ 「(免許証を受け取り) ……サトウトオルさん」

サトウ 「はい(手を出す)」

トミヤマ 「ああ(免許証を返す)」

サトウ 「トミヤマ、さん……でしたよね？(手を出す)」

トミヤマ 「はい……ああ(免許証を渡す)」

サトウ 「トミヤマ、シヨウジさん」

トミヤマ 「はい」

演奏終了。(M2)

サトウ 「でも、暗唱かあ……面白そうですね」

トミヤマ 「興味あります？」

サトウ 「ええ、まあ」

トミヤマ 「じゃあ、試しに参加してみませんか？まずは見学でも」

サトウ 「ありがとうございます。じゃあ、今度ちよつとお邪魔してみようかな」

トミヤマ 「どうぞ、どうぞ」

サトウ 「あ、もしかしたら練習中だったんじゃないや？どうぞ、続けてください。私は本でも読んで静かにしていますから」

トミヤマ 「いや、大丈夫です」

サトウ 「ほんとに？」

トミヤマ 「ええ」

サトウ 「じゃあ、少し話してもかまいませんか？」

トミヤマ 「どうぞ、どうぞ」

サトウ 「うれしいな。ときには、こういう具合に、見知らぬ人と話をするのもいいもんですよね」

トミヤマ 「そうですね」

サトウ 「何の話をしましょうかね……」

トミヤマ、タブレットをチラッと見る。

サトウ 「 아이폰ですか？」

トミヤマ 「ああ、失礼。ちょっとお知らせ機能がはたらいて……大した用件じゃありませんから」

サトウ 「メールか何か？」

トミヤマ 「ええ、まあ。お知らせ機能切っておけばいいんですが、つい忘れちゃって」

サトウ 「それ（スマートフォン）便利ですか、やっぱり」

トミヤマ 「ええ、場所も選ばないし、手軽だし、もう仕事以外でPC開くことありませんね」

サトウ 「ご自宅でも？」

トミヤマ 「ええ、ずっとこういうの待ってたんです」

サトウ 「へえ」

トミヤマ 「マックもウィンドウズも合わせると、4〜5台はあるんだけど、結局、これに落ち着いちゃった」

サトウ 「5台も？」

トミヤマ 「一応1台は仕事で使ってます。それと妻と娘が1台ずつ。で、クローゼットに2台」

サトウ 「トミヤマさん、娘さんがいるんだ」

トミヤマ 「ええ、生意気盛りでしてね」

サトウ 「そうですか」

トミヤマ 「娘がいるようには見えませんか？」

サトウ 「どうかかな？」

トミヤマ 「でも、少なくとも独身には見えなんでしょう」

サトウ 「どうして？」

トミヤマ 「いや、だってもうこんな歳だし」

サトウ 「こんな歳って？」

トミヤマ 「普通結婚してるでしょ、私くらいの歳になれば」

サトウ 「私は独身ですよ」

トミヤマ 「え？」

サトウ 「今はね」

トミヤマ 「そうですか……」

サトウ 「結婚はしたことがありますけど」

トミヤマ 「今は独身」

サトウ 「ええ」

トミヤマ 「……でも、ちょっと羨ましいな」

サトウ 「ほんとに？」

トミヤマ 「そりゃあ、ぼくももう一度自由になってみたいなって思いますよ」

サトウ 「でも、別れられないんだ」

トミヤマ 「そうですね」

サトウ 「どうして？」

トミヤマ 「どうしてって……」

サトウ 「生意気盛りの娘さんがいるから？」

トミヤマ 「そうですね、それが一番かな」

サトウ 「子供なんて、適当に金与えておけば勝手に育つでしょ」

トミヤマ 「でも、それじゃ……」

サトウ 「親としての責任を果たせない」

トミヤマ 「ええ、まあ……」

サトウ 「いい人だなあ」

トミヤマ 「サトウさんは……」

サトウ 「ああ、私は子供は作りませんでした。だから、別れるときも気楽でしたね。いたのはペットのネコだけだったから」

トミヤマ 「……」

サトウ 「ペットは飼ってます？」

トミヤマ 「ええ。自分が子供の頃、犬やネコを飼っていたからわかるんだけど、子供は生き物と一緒に育つたほうが絶対にいい。これはぼくの持論です」

サトウ 「犬？」

トミヤマ 「いえ」

サトウ 「じゃあネコ？」

トミヤマ 「カメです……クサガメ」

サトウ 「クサガメ？」

トミヤマ 「マンション住まいなんで、犬やネコは飼えないんです」

サトウ 「ハムスターとか鳥とか、そういうのじゃなくて、カメ」

トミヤマ 「マンションの自治会にうるさいオバサンがいるんですよ」

サトウ 「でもカメは大丈夫なんだ」

トミヤマ 「鳴かないし、臭いもほとんどないし、それに長生きだから」

サトウ 「面白くないでしょ、カメは」

トミヤマ 「そんなことないですよ、いろいろわかってくるんですよ、長く暮らしていると」

サトウ 「偏見だとは思うけど、可愛くないでしょ、あのフォルムというか、あの顔」

トミヤマ 「ですから、ずっと見ると可愛くなってくるんですよ。サトウさんもネコを飼っていたならわかるでしょ」

サトウ 「ネコとカメを一緒にしてほしくないなあ」

トミヤマ 「ですが……」

サトウ 「あばたもエクボ、ですよ。ウチのネコもブサイクだったからわかります」

トミヤマ 「ははは」

サトウ 「お宅の間取りは？」

トミヤマ 「一応3LDK」

サトウ 「3LDK！賃貸？」

トミヤマ 「え？いえ、買いました」

サトウ 「それなのに好きなペット飼えないんだ」

トミヤマ 「仕方ないですよ。ファミリー向けの大型マンションだから、みんなが好き勝手にペットを飼ったら、それこそ大変なことになっちゃいますから」

サトウ 「でも、凄いな、マンション買ったんだ」

トミヤマ 「そんなことないですよ。ローンがたつぷりあるし」

サトウ 「でも、凄いですよ」

トミヤマ 「家賃払うくらいなら、買ったほうが経済的なんですよ。それに遠いし」

サトウ 「埼玉県さいたま市南区別所2丁目15番」

ピアノのアクセント。

トミヤマ 「え？」

サトウ 「さつき免許証見せていただいたから」

トミヤマ 「あ、ああ……」

サトウ 「荒川の近く？」

トミヤマ 「そんな近くでもないけど……まあ、妻と自転車でときどき行きますよ。彩湖とかあるし」

サトウ 「自然にふれられるわけだ」

トミヤマ 「ええ」

サトウ 「じゃあ、家でカメを飼わなくてもいいじゃないですか」

トミヤマ 「いや、自然にふれるのと、生き物の世話をするのは……」

サトウ 「わかります」

トミヤマ 「よかった」

サトウ 「ここまで電車に乗ってわざわざ来たんですか？」

トミヤマ 「ええ。会社が近くなるので、定期で。無駄遣いはしないってわけ」

サトウ 「会社がこのへんってことは、出版関係？」

トミヤマ 「ええ、まあ」

サトウ 「インテリなんですネ」

トミヤマ 「インテリなんて……もう死語ですよ」

サトウ 「そうなんですか？でも、私の語彙の中ではインテリだ。それに、トミヤマさん、実にイ

ンテリって見た目だし」

トミヤマ

「どこが？」

サトウ

「鼻のあたりが」

トミヤマ

「……小さい頃から本が好きだったので、そういう関係の仕事につきたかったんです」

サトウ

「夢がかなったってわけだ」

トミヤマ

「でも、やってることは、とくに出版社だからってことじゃないんですよ」

サトウ

「どういうこと？」

トミヤマ

「わかるでしょ」

サトウ

「実際に本を作る仕事じゃなくて、経理とか人事とか……」

トミヤマ

「そういうこと」

サトウ

「あ、トミヤマさん、もしかして経営者？」

トミヤマ

「ちがいます。雇われですよ、ただの社員」

サトウ

「そうか、年齢の割に貫禄あるから、経営者なのかと思った」

トミヤマ

「年齢のわりについて……」

サトウ

「昭和35年10月9日生まれだから、51歳」

ピアノのアクセント。

トミヤマ

「それもさつき……」

サトウ

「ええ、免許証情報です。間違っていました？」

間。

サトウ

「何か？」

トミヤマ

「……すごい記憶力ですね」

サトウ

「そうですか？」

トミヤマ

「だって、ほんの一瞬だったでしょ、見たの」

サトウ

「一瞬って……それじゃ身分証明書見る意味ないでしょ。ちゃんと全部に目を通しました」

トミヤマ

「まいったなあ、じゃあ、ぼくの個人情報、かなり握られちゃったんだ」

サトウ

「住所と誕生日を知られると何か困りますか？」

トミヤマ

「困ることはないけど……」

サトウ

「初対面で、話をするわけだから、名乗りを上げたほうがいいと思うし、それに私は先にお見せした」

トミヤマ

「全然問題ないです。免許証なんて、そこらじゅうで身分証明書として使っているんだし、

盗み見ようと思う人がいたら、いくらでも見られるわけだから。でも、ちょっと驚いた

から」

サトウ 「驚いた？」

トミヤマ 「ですから、サトウさんの記憶力に」

サトウ 「トミヤマさん、私の情報は？」

トミヤマ 「お恥ずかしながら……お名前だけです」

サトウ 「え？住所も誕生日も覚えなかったんですか？」

トミヤマ 「ええ。写真と名前を見ただけなので……もう一度見せていただいてもいいですか？」

サトウ 「ダメです」

トミヤマ 「え？」

サトウ 「だって、ちゃんと見なかったのはトミヤマさんのミスであって、私ではない」

トミヤマ 「それはそうですが……」

サトウ 「うそうそ、冗談ですよ。(免許証を出す)どうぞ、しっかりと覚えてください。それでトミヤマさんが安心出来るなら、全然問題ない」

トミヤマ 「あ、私はそんな意味で……」

サトウ 「じゃあ再確認は必要なし？」

トミヤマ 「ええ、結構です。すみませんでした」

サトウ 「まあ、こうして顔合わせて話してるんだから、そこから生きた情報を得たほうがいいに決まってますからね」

トミヤマ 「ええ」

サトウ 「で、何の話でしたっけ？ああ、そうだそうだ、トミヤマさんがお若いのに貫禄があるって話だった」

トミヤマ 「貫禄は……運動不足ってことです」

サトウ 「スポーツはやらない？」

トミヤマ 「嫌いでした、子供のころから」

サトウ 「本好きですもんね」

トミヤマ 「ほんとは作家になりたかったんですけどね」

サトウ 「今からだって遅くないじゃないですか」

トミヤマ 「無理ですよ」

サトウ 「家庭があるから？」

トミヤマ 「それもあるけど、私には書くようなことないんですよ」

サトウ 「そう？」

トミヤマ 「悲しいけど」

サトウ 「じゃあ、今の仕事で一応は満足なさってるんですね」

トミヤマ 「100%ってわけじゃないけど」

サトウ 「いくらもらってます？」

トミヤマ 「100%ってわけじゃないけど」

サトウ 「いくらもらってます？」

トミヤマ 「100%ってわけじゃないけど」

トミヤマ 「え？」

サトウ 「お給料」

トミヤマ 「ちよつと待つてくださいよ」

サトウ 「いいじゃないですか、私に教えたって別に困ることないでしょ？」

トミヤマ 「でも」

サトウ 「いくらもらってるんですか？」

トミヤマ 「まいったなあ、安いですよ、ほんとに」

サトウ 「いいじゃないですか」

トミヤマ 「ボーナス入れても、500万そこそこ」

サトウ 「それだけ稼げれば何の文句もないでしょ」

トミヤマ 「でも、同年代の男性サラリーマンの平均年収より少ないし、貯蓄なんて全然……」

サトウ 「平均年収なんて言葉にごまかされちゃいけませんよ。ああいうものには何の実態もないんですから」

トミヤマ 「それはそうかもしれないけど、現実的にうちの生活水準は平均以下だと思うな……」

サトウ 「マンション買ったの？」

トミヤマ 「でも……」

サトウ 「いいですか、ここに4人のサラリーマンがいるとしますよ」

トミヤマ 「え？」

サトウ 「Aさんの年収は100万、Bさんは200万、Cさんは300万、で、Dさんは2000万としましょう。すると、4人の平均年収は、 $100 + 200 + 300 + 2000$ 、割ることの4だから、650万ですよ」

トミヤマ 「ですかね」

サトウ 「すると、4人のうち3人は平均より低いわけですよ」

トミヤマ 「そうですね」

サトウ 「でも、300万稼ぐCさんは、実質的には2位だ。おかしいでしょ」

トミヤマ 「おかしいですね」

サトウ 「つまり、そういうことなんですよ」

トミヤマ 「はあ」

サトウ 「わかりました？」

トミヤマ 「まあ、なんとなく」

サトウ 「それはよかった」

トミヤマ 「どうも」

サトウ 「平均とか、普通とか、く率とかって言葉には、気を付けないといけませんよ」

トミヤマ 「円周率にもですか？」

サトウ 「面白いなあ、トミヤマさんは」

トミヤマ 「そうですか？」

サトウ 「私ね、以前、どうしても仕方のない理由があつて、円周率を100桁ほど覚えなければならなくなりましてね」

トミヤマ 「100桁ですか……あ、でもサトウさん記憶力がいいから」

サトウ 「まあ、覚えるには覚えたんですが、だからといって、何かいいことがあるわけじゃない。ソラで言ったりすると、拍手をもらえるくらいですよ」

トミヤマ 「やっってくださいよ」

サトウ 「3. 1415926535 8979323846 2643383279 5028841971 6939937510 5820974944

5923078164 0628620899 8628034825 3421 170679 8214808651 3282306647

0938446095 5058223172 5359408128 4811 174502 8410270193 8521105559 …」

ピアノリスト、途中から円周率の数字を音に置き換えて、演奏する。(M3)

トミヤマ 「(拍手して) すいいな」

サトウ 「間違つても誰もわからないけど」

トミヤマ 「なるほど、たしかに」

サトウ 「よかつたなあ」

トミヤマ 「何がですか？」

サトウ 「トミヤマさんにお会いできて」

トミヤマ 「ほんとですか？」

サトウ 「ええ、ほんとにそう思います」

トミヤマ 「光栄です」

サトウ 「実はね、私はあまり他人(ひと)と話をしないんですよ」

トミヤマ 「そうですか」

サトウ 「必要なこと以外、喋らない。そのほうがラクですから」

トミヤマ 「わかります」

サトウ 「そう？」

トミヤマ 「ぼくも気の利いた話なんてできないほうで、会社でも家でも聞き役専門ですから」

サトウ 「そんなふうに見えないけどなあ」

トミヤマ 「いや、ほんと。会社でなんか無口の代名詞みたいに言われてるんですよ」

サトウ 「でも、たまには誰かと話をしたくなる？」

トミヤマ 「ええ……サトウさんの話も聞かせてくださいよ」

サトウ 「どうして？」

トミヤマ 「これ以上、ぼくの話をして盛り上がりませんよ」

サトウ 「そんなことないですよ。トミヤマさんのこと、もつといろいろ知りたいな」

トミヤマ 「でも、なんだか調査されてるみたいで、なんていうかな、会話してるって感じじゃないんだな」

サトウ 「そうかな？」

トミヤマ 「そうですよ。サトウさん、質問するばかりだし」

サトウ 「私が話す番になったら、ちゃんと話しますよ」

トミヤマ 「そういうことじゃなくて、会話をしましょうよ、会話を」

サトウ 「してるじゃないですか」

トミヤマ 「なんか、事情聴取されてるみたいなんだな」

サトウ 「事情聴取？」

トミヤマ 「そう。こんど、ぼくが聞く番になったとしても、同じことだと思っんですよ。あ、もしかしてサトウさん、刑事さんだったりして」

サトウ 「まさか……初対面なんだし、おたがいの情報をおたがいに獲得しないことにはしょうがないでしょ。天気の話から先に進まない」

トミヤマ 「それはわかりますけど……」

サトウ 「目的も持たずに話をしてても無意味じゃないですか」

トミヤマ 「それですよ」

サトウ 「え？」

トミヤマ 「僕は、無意味な会話をしたいんですよ」

サトウ 「どうして？私のこと知りたくない？」

トミヤマ 「無意味な会話をしながら発見していけばいいんじゃないですかね」

サトウ 「発見？」

トミヤマ 「そう。どこの誰で、何をしてるかとか、何歳とか、そういうこともたしかに大事だけど、もつとちがった……」

サトウ 「じゃあ、世間話でもしましょうか？」

トミヤマ 「え、ええ、そうですね、それがいいな」

サトウ 「では……何をお聴きになってたんです？」

トミヤマ 「え？」

サトウ 「私がここに来たとき、ギンズバーグ暗唱しながら、何かお聴きになってたでしょ」

トミヤマ 「ああ」

サトウ 「グレイトフル・デッドとか？」

トミヤマ 「いえいえ」

サトウ 「じゃあ、ストレートにボブ・ディラン？」

トミヤマ 「音楽じゃありません」

サトウ 「音楽じゃない……ああ、自分の声を録音して……」

トミヤマ 「ちがいます。ホワイトノイズです」

サトウ 「ホワイトノイズ？」

トミヤマ 「ええ。ほら……」

ノイズが聞こえてくる。

サトウ 「なんでノイズなんかを？」

トミヤマ 「好きなんです」

サトウ 「へえ」

トミヤマ 「ホワイトノイズは、一番身近な完全なるものなんです」

サトウ 「どういうことですか？」

トミヤマ 「簡単に言うと、あらゆる情報が詰まってるんです」

サトウ 「情報？」

トミヤマ 「そう。それも存在する限りのすべての情報」

サトウ 「まさか」

トミヤマ 「本当です。取得できる人と、そうでない人はいるようですけど」

サトウ 「そうなんですか？」

トミヤマ 「だけど、訓練すればできるようになります」

サトウ 「ほんとに？」

トミヤマ 「できます。いつもやっていることですからね」

サトウ 「どういうことでしょうか？」

トミヤマ 「たとえば、電車に乗つてるときなんか、物凄いノイズの中にいるわけじゃないですか」

サトウ 「ええ」

トミヤマ 「そんな中でも、私たちは自分の聞きたい音を選別してるでしょ」

サトウ 「気になる話なんかには知らないうちに耳がいつてることあるなあ」

トミヤマ 「でしょ。それと同じ要領で訓練するんです。ホワイトノイズをずっと流し続けてくれる

アプリがありますから」

サトウ 「へえ」

トミヤマ 「最初は雨音のようだったり、水の流れのようだったりするんですけど、そのうち音楽を

聞けるようになります。で、いつかは言葉が聞こえる……かも」

サトウ 「面白そうだな」

トミヤマ 「やってみます？」

サトウ 「じゃあ、少しだけ」

トミヤマ 「では、目を閉じて、よく音を聞いてください……何が聞こえますか？」

ピアニスト、ゆっくりした演奏。(M4)

サトウ 「波……夕立……麦畑……地下鉄……拍手……セミ……滝……ダムの放水……シャワー……
……子供たちの歓声」

演奏がしばらく続き、終わる。(M4)
ホワイトノイズも消える。

トミヤマ 「素晴らしい」

サトウ 「そうですか？」

トミヤマ 「素晴らしいイメージの展開でした。イメージ、つまり想像力こそが限界を超えるキーワードなんです」

サトウ 「(トミヤマに)あの……」

トミヤマ 「はい？」

サトウ 「ちよつと質問なんですけど、よろしいですか？」

トミヤマ 「どうぞ」

サトウ 「ホワイトノイズと電車の中のノイズって、根本的に違うものなんじゃないでしょうか」

サトウ 「電車の中のノイズは日常音の集合だから、その中から必要な情報を取り出すことはできても、ホワイトノイズからは無理なんです……気になった音以外が聞こえなくなるのは、それが廃棄音だからで……それに、ホワイトノイズには意味はないわけだから……」

トミヤマ 「どんな音にも意味なんかありませんよ」

サトウ 「はあ……」

トミヤマ 「聞く側に意味があるんです。音楽にしたって、人間に象徴能力があるから意味があるように感じるんです。猿には音楽的な行動はありません」

サトウ 「でも、猿も何か叩いたりして遊びますよね」

トミヤマ 「音を立てはしますけど、それは全部サインなんです。純粹な遊びとしての音楽的行動はないんです」

サトウ 「そうでしょうか？」

トミヤマ 「猿が音楽を楽しんでいるように見えるのは、擬人化することによって意味を作り出した、やはり受け手の問題なんです」

サトウ 「そうかもしれませんが、でも、音と言葉はやっぱり違うでしょ。言葉には意味がある」

トミヤマ 「ユウオナニツツ (You wanna bet?)」

サトウ 「え？」

トミヤマ 「ほんとにそう思います？って言ったんですよ、英語で」

サトウ 「英語でしたか」

トミヤマ 「ね、音でしょ。意味なんかないでしょ」

サトウ 「でも、それはぼくが英語が苦手なだけで……」

トミヤマ 「だけど、相手の知らない言葉をいくら叫んだところで、意味はないでしょ。言葉はコミュニケーションでできてはじめて意味があるんだから。通じなければ、どんなに自分に意味があっても仕方がない。音に過ぎないわけです」

サトウ 「なるほど」

トミヤマ 「とにかく、一度じっくりホワイトノイズと向き合ってみてください。それこそ、坐禅と同じような効果がありますよ」

サトウ 「でも、私は 아이폰とか持っていないから」

トミヤマ 「サトウさんは、ネットは全然？」

サトウ 「ええ……便利なんだろうが、どうも私にはなじまないって言うか、必要ないんですよ……連絡取るような相手もいませんから」

トミヤマ 「連絡取るための道具じゃないですよ。ネット端末と携帯電話は根本的にちがうものです」
サトウ 「どういう風に？」

トミヤマ 「電話と違って、もつと開かれた世界なんですよ。それも漠然とした世界じゃなくて、一人一人が見えるんです」

サトウ 「イメージできないなあ」

トミヤマ 「難しく考える必要はありません。これはコンピュータなんかじゃありません。家電です。テレビと同じだと思えばいい。テレビだって、どういう構造でどうなつてるとかわからないのに使つてるでしょ。それと同じです」

サトウ 「なるほど」

トミヤマ 「で、これがツイッターです……あ、今、都内を通り魔が逃げまわっているらしいですよ」

サトウ 「え？」

トミヤマ 「もう四人ぐらい被害者が出てるそうです」

サトウ 「どこで？」

トミヤマ 「練馬の方みたいです」

サトウ 「じゃあ、この辺まで来やしませんよ。その前に捕まる」

トミヤマ 「だといいけど……だけど、恐いなあ」

サトウ 「何が？」

トミヤマ 「通り魔ですよ。ただ街を歩いているだけなのに、いきなり襲われるんですよ。しかも襲われる理由があるとしたら、たまたまそこにいたからってことだけ。昔は人通りの少ない道とかを気をつけてればよかったですけど、今は人混みの方が危ないくらいですからね。だから、ぼくは電車のホームでは、なるべく線路側を歩かないようにしています。交差点でも、車道の近くで待たないほうがいいらしいですよ」

サトウ 「そんなに警戒しながら歩いてたら疲れるでしょ」

トミヤマ 「でも、気をつけるにこしたことはないから」

サトウ 「だけど、通り魔にやられる確率って、がんになる確率とか交通事故に遭う確率に比べたら、ゼロみたいなもんじゃないですか？そんなことで不安になってたらもたないですよ」

トミヤマ 「数学的にはそうかもしれないけど、心理的不安というものは、なかなか数学的には払拭できないですよ」

サトウ 「なるほどね」

トミヤマ 「前科のある人間にGPS持たせて、居場所が常にわかるようにしようって試みもあるんですよ。プライバシーの問題はあるかもしれないけど、それくらいはしてもいい気がする」

サトウ 「安心できる？」

トミヤマ 「少なくとも被害に遭う確率を下げることはなるでしょう」

サトウ 「初犯の人間はどうするんです？強制的に全国民の遺伝子調べて、犯罪者になる確率の高い人間にもGPSを持たせますか？」

トミヤマ 「できることなら、そうしてほしいですね。特にお子さんのいるご家庭では、そういう意見が多いんじゃないでしょうかね。ツイッターでもそういうご意見、よくみかけますよ」

サトウ 「相互監視と徹底管理社会か……未来社会はもうはじまっているんですね」

トミヤマ 「管理社会を悪と決めつけるのは、認識不足だと思いますよ。自分がルールを犯さない限り、管理社会の方がはるかに安全です」

サトウ 「安全か……少しくらい恐い社会の方が面白くないですかね」

トミヤマ 「それはレトリックですよ。昔から、善良なる市民が変わることなく求めているのは、平和と安全です」

サトウ 「でも、それじゃ毎日同じような、刺激のない日常がただボヤクと続くんじゃないかな」

トミヤマ 「ぼくは徹底したマナーリズムを愛します。毎日が同じように変わらないということこそ、平和であり安全なんです。刺激や変化は必要ありません」

サトウ 「大した正論だ。正論には何を持ってしても太刀打ちできません」

トミヤマ 「あ、すみません、つい勝手に喋っちゃって……」

サトウ 「いえいえ、すぐくためになります」

演奏。(M5)

気不味い間。

演奏終了。(M5)

サトウ 「トミヤマさんは、どうして暗唱の会に参加されたんです？」

トミヤマ 「なんて言うかな、大きな声を出すのって気持ちいいからかな」

サトウ 「たしかに、あまり大きな声を出す機会はありませんからね。私なんか、どんどん声が小さくなっちゃう」

トミヤマ 「それに、声に出すのは、他人が書いた文章だったりセリフだったりするから、自分には言葉に対する責任はないし、芝居でもないから演技がどうだこうだとも言われませんが、楽です」

サトウ 「なるほど。それに記憶力の訓練にもなるから、ボケ防止にも役立つかな」

トミヤマ 「記憶に関しては、サトウさんはなんの問題もないじゃないですか。いきなり長文暗唱を披露して、みんなを驚かせてくださいよ」

サトウ 「トミヤマさんは、今までどんなものを暗唱されたんです？」

トミヤマ 「実は、まだ人前では一度も……」

サトウ 「え？」

トミヤマ 「誰もいないとき、ここで練習してるだけです」

サトウ 「そうなんですか」

トミヤマ 「こう見えても、完璧主義のところがありましたね。やるからには間違えたくないから」

サトウ 「わかります」

トミヤマ 「でも、1回もやらないで聞いているだけってのも、そろそろまずいかなとは思ってるんですけどね」

サトウ 「何をやろうと思ってるんですか？」

トミヤマ 「さつきやつてたギンズバーグがいいかなあとは思ってるんです」

サトウ 『吠える』ですね」

トミヤマ 「はい」

サトウ 「でも、ビート詩人が好きとは意外だな」

トミヤマ 「似合いませんか？」

サトウ 「いえいえ、人は見かけによらないですからね。トミヤマさん、昔活動家だったとか」

トミヤマ 「まさか。自分じゃないものに憧れるってことですよ」

サトウ 「最初の一節とか出ます？覚えてるんでしょう？」

トミヤマ 「え〜……」

サトウ 「(促すように) 僕は見た……」

トミヤマ 「僕は見た……狂気によって破壊された僕の世代の最良の精神たちを 飢え 苛立ち 裸で 夜明けの黒人街を腹立たしい一服の薬(ヤク)を求めて のろのろと歩いてゆくのを……って感じだったかな」

サトウ 「(拍手して) いいじゃないですか、うん、すごくいい」

トミヤマ 「そんなにおだてられても……」

サトウ 「さ、最初からもう一度」

トミヤマ 「でも……」

サトウ 「私が本を見てあげますから。さあ」

トミヤマ 「じゃあ、お願いしようかな」

サトウ 「どうぞどうぞ」

トミヤマ 「では……」

トミヤマ、急に本気モードで語り出す。

演奏がそれに加わる。(M6)

トミヤマ 「カール・ソロモンよ！僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは 僕よりも気が狂っている

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは 非常に調子が変わっている

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは 僕のかあさんの幽霊の真似をしている

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは 十二人の秘書を殺害した

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは この 目に見えない諧謔を笑う

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこで僕たちは 同じようにどえらいタイプライターを打っている作家である

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこで きみの病状が悪化したとラジオが伝えた

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこで 頭蓋骨の機能はもはや感覚のウジ虫をうけ入れない

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみはユーティカのオールドミスのお茶を飲む

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは 看護婦の体にじゃれついて

ブロンクスの女面女身(によめんによしん)の鳥の翼を持った怪物だとしゃれてをいっ

ている

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは 狂人拘束衣を着て 現実の地獄のピンポン試合に負けるぞと絶叫して

いる

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは 音程の狂ったピアノを強打した 魂は成城で不死である それは嚴重

な精神病院で神も信じないで息絶えるべきではないのだ

五十回以上のショックによつて きみの魂はもうきみの肉体へむなしい受難の旅から
帰つてくることがないだろう

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは 精神病院の医師を非難しながら ファシストの国家的なゴルゴダに対
するヘブライの社会主義革命を計画している

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこできみは ロングアイランドの空を引き裂いて超人的な墓から人間イエスをよみ
がえらせるだろう

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこで 二万五千人の気の狂った同志たちがインターナショナルの最後の一連を合唱
している

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

そこで 僕たちはベッド・シーツの下でアメリカ合衆国を抱きしめて接吻している 一
晩中咳をしていて僕たちを眠らせないアメリカよ

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

照り輝き 幻の壁が崩壊していく病院へ 天使の爆弾を落としてきた魂の飛行機の爆
音におどろいて僕たちは昏睡から目覚めた おお やせこけた人間どもが外へ逃げ出
すおお星をちりばめた慈悲のショックよ 不滅の戦いがここにある おお 勝利よ

肌着のことなど忘れてしまえ 僕たちは自由だ

僕はきみと一緒にロックランドにいるのだ

アメリカを横切る ハイウェイを通り 海の旅から水をしたたらせながら 僕の夢の
中へたどり着いて きみは西部の夜に閉ざされている僕のコテージのドアに向かって
泣いている

演奏、トミヤマのセリフとともに終了。(M6)

サトウ 「すばらしい！」

トミヤマ 「ありがとうございます」

サトウ 「本当によかった」

トミヤマ 「途中から、自分じゃなくて、誰か別の人が喋ってるみたいな感じでした」

サトウ 「たしかに、ちよつと恐山のイタコのようなムードもあつたな。ギンズバーグの霊が降り
てきたつていうか」

トミヤマ 「それはちよつと恐いな」

サトウ 「恐がりなんですな」

トミヤマ 「ええ」

サトウ 「どうします？」

トミヤマ 「これから？」

サトウ 「ええ。もう少し話をしてかまいませんか？」

トミヤマ 「はあ」

サトウ 「トミヤマさんに、私のことを知ってほしくなりましたね」

トミヤマ 「どうして？」

サトウ 「あれ、私のこと知りたくはないですか？」

トミヤマ 「いや、そんなことは……」

サトウ 「でしょ。だって最初に、私に興味があるっておっしゃいましたもんね。あれ、ウソじゃないでしょ？」

トミヤマ 「嘘じゃないですよ」

サトウ 「よかった。でも、私の話つてのはそんなに長いもんじゃないんですよ。大した人生送ってませんかからね」

トミヤマ 「そんなことないでしょ、なんか、いろいろありそうだな」

サトウ 「そのジャケット、トミヤマさんのですか？」

トミヤマ 「え？ええ」

サトウ 「ちよつと拝見してもいいですか？」

トミヤマ 「どうぞ。でも、大したものじゃありませんよ」

サトウ 「いや、なかなかいい。好きですよ、こういうの」

トミヤマ 「それはどうも」

サトウ 「どこでお買い求めに？」

トミヤマ 「どこだったかなあ？もうずいぶん前だったので……妻が誕生日のプレゼントに買ったんです」

サトウ 「そうですか……ちよつと着てみてもいいですか？」

トミヤマ 「どうぞ」

ピアノストによるアクセント。

サトウ 「ああ、いいなあ。軽いし、通気性もいいから、今日みたいな暑い日にはもってこいですね。でも、私にはちよつと若いかな？」

トミヤマ 「そんなことありませんよ。お似合いだと思います」

サトウ 「こういうの一つ買おうかな。ほら、外は暑いけど、どこかに入ると冷房が効きすぎて、寒い思いすることがあるじゃないですか」

トミヤマ 「電車とかバスとかも冷房強すぎですよね」

サトウ 「そうそう。そういうときこういうのがあるといいですよね」

トミヤマ 「私もそれで手放せないんですよ」

サトウ 「どこで買ったか思い出せませんか？」

トミヤマ 「ちょっと待ってください……ああ、ダメだ……ほんとお恥ずかしい」

サトウ 「お気になさらず」

トミヤマ 「サトウさんは、何でも覚えているんだろうな？」

サトウ 「まあ、そうですね」

トミヤマ 「うらやましい」

サトウ 「そうですね？でも、何でも覚えているのって、そんなにいいもんじゃありませんよ」

トミヤマ 「どうして？……あ、でも、そうか……」

サトウ 「わかります？」

トミヤマ 「はい、なんとなく……ああ、それより、どうです、サトウさんも暗唱、おやりになって

みるっていうのは……」

サトウ 「そうですね」

トミヤマ 「きつと、いくつも覚えてらっしゃるものがおありでしょう？」

サトウ 「ええ、まあ」

トミヤマ 「どんなのを？」

サトウ 「そうだな……私がやるとしたら、ジェリーと犬の物語だな、やっぱり」

トミヤマ 「ジェリーと犬の物語？」

サトウ 「ええ、そういうのがあるんですよ。すごい長ゼリフでしょ」

トミヤマ 「もしかして、この本に？」

サトウ 「ええ……」

ピアノリストによるアクセント。

トミヤマ 「年季入ってますねえ」

サトウ 「同じ本を何度も読むのが好きなんです。中でもそれが一番好きだな」

トミヤマ 「すごい書き込みだなあ」

サトウ 「自分用に書き直したりしたんです。自分のものにしたかったから」

トミヤマ 「あ、わかった」

サトウ 「え？」

トミヤマ 「サトウさん、演劇関係のお仕事されてるんじゃないやありません？」

サトウ 「演劇関係？」

トミヤマ 「もしかして役者さんとか？」

サトウ 「いいえ」

トミヤマ 「じゃあ、演出家？」

サトウ 「どうしても演劇関係者にしたいんですか？」

トミヤマ 「ちがうんですか？」

サトウ 「ちがいます」

トミヤマ 「そうですか」

サトウ 「私が演劇関係者だと何か辻褃が合うんですか？」

トミヤマ 「ええ、まあ、少しは」

サトウ 「へえ、面白いなそういうの」

トミヤマ 「サトウさんは何なさってるんですか？」

サトウ 「あれ、私がどこの誰で、何をするとか、何歳かとか、そういうのどうでもいいんじゃないですか？」

トミヤマ 「あ、いや、その……」

サトウ 「ああ、すいません、なんかイヤミな言い方でした？」

トミヤマ 「いや、そんなことは……」

サトウ 「実は、私、現在失業中なんですよ」

トミヤマ 「そうですか」

サトウ 「でも、まだまだ働かなくちゃならないんです。で、職探しの真つ最中。何かいい仕事ありませんか？」

トミヤマ 「さあ、私にはちよつと……」

サトウ 「そうですか」

トミヤマ 「お役に立てませんで」

サトウ 「いえいえ、トミヤマさんに就職のお願いをする方が筋違いなんだから」

トミヤマ 「……あの、印刷工場の作業員でしたら、ぼくにもなんとか話はできるかと思いますが……」

……

サトウ 「いえ、本当に大丈夫です」

トミヤマ 「そうですか？」

サトウ 「実のところ、今あんまり働く気がないんですよ。さつきも言ったとおり扶養家族がいるわけでもないし、失業保険はまだあるんでね」

トミヤマ 「わかります、その気持ち」

サトウ 「どの気持ち？」

トミヤマ 「働きたくないってこと」

サトウ 「そうですか？」

トミヤマ 「ええ」

サトウ 「でも、トミヤマさん、お仕事には満足なさってるって言ってたじゃないですか」

トミヤマ 「まあ……だけど、なんのために働いてるのかとか考え始めると……」

サトウ 「家族のため？」

トミヤマ 「そうですね……責任はあります」

サトウ 「ふうん」

トミヤマ 「よしでしょう、なんか湿っぽくなっちゃう」

サトウ 「べつに私はかまいませんけど」

トミヤマ 「いや、よしでしょう」

サトウ 「じゃあ、私のこと少しお話しましょう」

トミヤマ 「そうですね、サトウさんのことをうかがいたかったんだ。また、ぼくの話をしちゃうところだった」

サトウ 「ああ、いいんです、適当に聞き流していただければ。喋りたいだけで、べつに熱心に聞いてほしいわけじゃないから」

トミヤマ 「そうですか？」

サトウ 「じゃあ、始めましょうか」

トミヤマ 「お願いします」

サトウ 「実録、サトウトオル！」

サトウ、何かを暗唱しているかのように喋り始める。

サトウ 「現在私が住んでいるのは、ここからちよつと離れたところにある、築四十年はゆうに経とうかつていうおんぼろアパート。あるでしょ、もう少し東に行つたほうにゴミ溜めみたいなアパートがいっぱい並んでるところが。その中の一つです。あそこそ再開発してほしいですよ。一階に大家の爺さんと婆さんの夫婦が住んでる。どっちも八十代だと思ふな。昭和とともに生きてきたつて言つてたから。この老夫婦に子供はいない。年金とアパート経営で悠々自適かとおもつたら、さにあらず。いつまでたつても欲望から解放されずに、ずるそうな目をして、家賃の催促に懸命なんです。芸術的なものとはまるで縁がなくて、薄暗い部屋には絵の一枚すらかかつかつちやいない。朝から晩までテレビとにらめっこ。趣味なんて全然ないんだらうな。旅行にも出かけやしない。きつと、旅行に出てる間に夜逃げでもされるんじゃないかって心配で仕方ないんだらうな。とにかく、お金に換算しなけりや、愛情でさえわからない。神さまにだつて『で、おいくらですか？』つてききかねない有様だ。で、そのアパートつていうのが、大学の野球グラウンドのすぐ裏手にあるんです。名前を言えばすぐにわかるような有名な大学なんですよ、頭悪くて。その野球部の練習グラウンドなんだけど、これが堪えられない。朝練だかんだか知らないけど、毎朝7時つていうとわけのわからない大声出して駆けずり回つてる。眠れない夜で、明け方ようやく眠れそうだと思つたときなんか地獄ですよ。だいたい世間の人は、どうしてスポーツつていうと大目に見るんですかね……あいつらときたら、大声だし、大笑いするし、大食いに大酒飲み。生きて行くのに必要以上の筋肉つけて、世界は自分たちのためにあると錯覚して……どうにかならぬいんしょうかね……とところで、私の部屋つていうのが、ちよ

つと変わってましてね。多分アパートはL字型の建物なんだと思うんだけど、私の部屋はそのLの角部分にあるんです。でね、図に描いてみればわかるんだけど、妙な間取りにしたために、私の部屋は外に向かって窓がないんです。窓は全部、といっても二つだけど、廊下に面してる。だから、エアコンもつけられないし、夏なんか部屋にいられたもんじゃやない。カーテンをひいてるとはいうものの、どうしたって窓は開けたままになる。おまけに共同トイレなもんだから、同じ階に住んでる2世帯の人間がひっきりなしに廊下を通る。私にはプライバシーなんてものはないんですよ。でね、こつちも覗かれてるだけじゃ悔しいから、廊下を通るやつらを観察してるんです。両隣の片方には、かなり若い夫婦が住んでる。夫婦じゃないかもしれない。同棲？どうやら、二人揃って演劇をやってるらしい。劇団にでもはいつてるのかな？とにかく、年中セリフの稽古をしますよ。それも代わり映えのしない、同じようなセリフをね。わかるでしょう？『只今参りました』とか『左様に御座いますか』とか……でも、男の方がセリフの数は多いみたいなんだ。ま、それも仕方ないな。女のほうは、どうして人前が出る気になったかね、っていうようなご面相なんです。それでもせつせとアルバイトして、いつかは大きな舞台の主役をつかむんだって頑張ってる。健気なもんですよ。でね、夜にでもなれば、ベッドシーンの練習にもぬかりはないんだ。ほとんど毎晩してる……さて、反対側のもうひと部屋には、パキスタン人のひと家族が住んでます。父ちゃん母ちゃんにガキが3匹。女、男、女の順。私の部屋とそう広さは変わらないはずなのに、どうやって暮らしてるんだろう？毎日夕飯の時間になると、一番下の女の子の泣き声が響き渡る。そのあとお母ちゃんの怒鳴り声。365日、まったく同じ調子なんです。それと、この部屋にはしょっちゅう客が来てる。みんな親戚みたいだけど、もちろんちがうかもしれない。それから……他の階にも変わったのが住んでると思うんだけど、顔を合わせたことはないんです」

非常に静かな演奏。(M7)

サトウ、トミヤマの様子をうかがっている。

サトウ 「どうです？」

トミヤマ 「あ……でも、どうしてそんなところに……」

サトウ 「いい年をして？」

トミヤマ 「そんなことは……」

サトウ 「これでもトミヤマさんと同じくらいるときまでは、一人前の暮らしをしていたんですよ。いや、ほんと。賃貸だけど、3LDKのマンションでね。妻と二人で、近所には内緒でネコを飼ってね。アメリカン・ショートヘア。高かったんですよ。でも、このネコが失敗だったんだな。わかります？」

トミヤマ 「……いえ、わたしにはどうも」

サトウ 「じゃあ、教えてあげる。実はこのネコがね……ああ、そうだ、トミヤマさん、奥さんとはよくお話なさいます？」

トミヤマ 「最近はあるまり……」

サトウ 「じゃあ、気をつけたほうがいいですよ」

トミヤマ 「……」

サトウ 「うちもね、いつのころからか、あんまり喋らなくなりましたよ。話すことがないって
いうか、家には寝に帰るだけってところありましたから。それに、一日中テレビがついて
ました……メシ食うときも、ふたりともテレビの画面を見て、テレビの音を聞いている
んですよ。わかりますか？」

トミヤマ 「わかりますよ」

サトウ 「でね、それが自然な状態になったわけですよ。それでも、私はどこもそんなもんだらうっ
て思っていました。子供がいればまた違ったのかもしれないですけど」

トミヤマ 「そうですね、違いますよ」

サトウ 「やっぱりなあ。でも、こればかりは仕方がないんです。実はね、妻には子宮がなかつ
たんです」

トミヤマ 「……」

サトウ 「子供は最初からどうにもならないってわけ。でも、そんなことは結婚する前からわかっ
てましたし、結婚も遅かったから、おたがいに子供は最初から作る気なんてなかったし
……それで、ネコでも飼おうかってことになって」

トミヤマ 「……そうですか」

サトウ 「ところが、ネコを飼ったら、妻はネコに向かって喋り始めたんです。私のことをパパっ
て呼んで、『パパは最近太りましたね』とか『今度のボーナス少ないですね』とか……
私に直接言わないで、ネコを通して言うようになったんです。でも、それもよくあるこ
とじゃないですか」

トミヤマ 「うちだって、娘を通して嫌味を言われることはありますよ」

サトウ 「だから、大して気にもしていなかった、っていうか、無視してるようになってちやったん
で、ますます会話がなくなりましたね。そうになると、妻はさらにネコに喋りかける。し
まいに、妻が何言っても『ニャーニャー』言ってるようにしか聞こえなくなりました」

トミヤマ 「……」

サトウ 「バラエティ番組のヒステリックな大笑いと妻のニャーニャーに家の中は占領されて
ね……久しぶりに聞いた妻の言葉は、『離婚して』だったんです。裁判やったんですけ
ど、負けました。ちょうどトミヤマさんと同い年のころ」

トミヤマ 「……」

サトウ 「で、そこから、今住んでるアパートに辿りつくまでに、またいろいろあるんですよ」

トミヤマ 「あの……」

演奏終了。(M7)

サトウ 「なに？」

トミヤマ 「もう、このへんで……」

サトウ 「どうして？私のこと知りたいんですよ？」

トミヤマ 「いや、そこまで突っ込んだことは……」

サトウ 「まだ、序の口ですよ。突っ込んだ話はこれからです」

トミヤマ 「どうしてぼくなんかに？」

サトウ 「トミヤマさんなら秘密にしておいてくれるだろうと思っただけ」

トミヤマ 「ぼくは口は固いですよ。いままでの話もよそでは絶対しません、妻にもね」

サトウ 「べつに奥さんに話したつてかまいませんよ。私は奥さんのことなんて全然知らないんだし」

トミヤマ 「いや、でも……」

サトウ 「でも、この先会うこともあるかもしれない？」

トミヤマ 「どういうことですか？」

サトウ 「安心してください。お宅の住所を知っているからって、お邪魔しようなんて考えてもいませんから」

トミヤマ 「……」

サトウ 「それより、ほんとにもういいの？ここから先が減多に聞けないようなエピソード満載なだけでなあ」

トミヤマ 「ええ、もういいです」

サトウ 「残念だな。せっかくこの部屋には、私とトミヤマさんの二人しかいないっていうのに」

トミヤマ 「どういうことですか？」

サトウ 「いえ、べつに。それより、私の話、おたくの出版社に売り込めないですかね？」

トミヤマ 「さあ、ぼくにはどうも……」

サトウ 「判断できない？」

トミヤマ 「ええ、わかりません、ぼくには、サトウさんが何を語りたのか……」

サトウ 「嘘だ」

トミヤマ 「ほんとですよ」

サトウ 「そうか、まだこの先の話を聞いてないからだな」

トミヤマ 「……」

サトウ 「じゃあ、お話ししましょう。妻と別れてから、私がどうしてあのボロアパートに住むハメになったのか」

トミヤマ 「もう結構です。ぼくは、そこまで初めてお会いした人のことを知りたいとは思わないんです」

サトウ 「なんだつて」

ピアノリスト、以下のイメージを演奏で表す。(M8)
階段を下りてくる足音。

犬が吠える。

ピンが割れる音。

階段を上っていく足音。

犬が吠え続けている。

サトウ

「酔っ払いだな」

トミヤマ

「申し訳ありませんけど、ぼく、もう帰りますから」

ピアノリスト、突然、暴力的で激しい演奏。(M9)

同時にホワイトノイズが響き渡る。

トミヤマ、抵抗するがかなわない。

演奏とホワイトノイズが消える。(M9)

トミヤマ

「どういうつもりなんだ！」

サトウ

「だってトミヤマさん帰るなんて言うから」

トミヤマ

「ああ、そうだよ。ぼくはもう帰りたいんだ」

サトウ

「でも、今出るのはまずいですよ」

トミヤマ

「どうして？」

サトウ

「今のが酔っばらいじゃなくて、通り魔だったら命取りだ」

トミヤマ

「通り魔？」

サトウ

「そう言ってたでしょ」

トミヤマ

「この辺りまでは来ないと思うって言うってたただじゃないか」

サトウ

「誰が？」

トミヤマ

「あんたがだよ」

サトウ

「あんた？」

トミヤマ

「あ、ああ、失礼。つい……」

サトウ

「まあ、いいけど。だけど一応、私は年長者だからね」

トミヤマ

「すみません……でも、今のは十中八九酔っ払いですよ。でなきや、ただの通行人かなんかだ」

サトウ

「もしそうじゃなかったら？」

トミヤマ

「……」

サトウ

「とにかく、私はトミヤマさんを助けてあげたんですよ」

トミヤマ 「……それはどうもありがとうございます。おかげで助かりました」

サトウ 「わかってもらえましたか」

トミヤマ 「ええ、よくわかりました」

サトウ 「それはよかったです」

トミヤマ 「本当にありがとうございます」

サトウ 「どういたしまして。さてと、それじゃあ、離婚裁判に負けたあとの話をしてあげましよう」

トミヤマ 「もう本当に結構です。ぼくは帰りたいです」

サトウ 「あれ、聞きたくないの？」

トミヤマ 「あなたはいったい……」

サトウ 「聞きたいでしょ。もしかしたら、トミヤマさんの未来の姿かもしれないだし」

トミヤマ 「なんだって？」

サトウ 「家ではゆつくりできないんじゃないの？女たちに乗っ取られて」

トミヤマ 「でも、シャワーも浴びたいし、横になってくつろぎたいものですから」

サトウ 「で？」

トミヤマ 「え？」

サトウ 「それからどうするんです？奥さんと娘さんが寝静まったら、こっそり起きだして、ツイッターで何かつぶやくんですか？」

トミヤマ 「なんだって？」

サトウ 「ベッドの中で 아이폰 で？コンピュータの前まで行く必要ありませんよね。仕事以外は全部それですませちゃうんだから」

トミヤマ 「……」

サトウ 「でも、そんなちっちゃい画面で何を見てるんです？そんなものがほんとに世界と繋がってると思います？」

トミヤマ 「……何が言いたいんですか？」

サトウ 「だから、これからする話を聞けばわかります。ネコの話なんですよ。妻が残していったアメリカン・ショートヘアと私の愛と没落の話。聞きたいでしょ？」

トミヤマ 「結構です」

サトウ 「なんで？」

トミヤマ 「はつきり言いますけど、ぼくはもうあなたの話を聞きたくないんだ」

サトウ 「どうして？」

トミヤマ 「わからない？」

サトウ 「わからないなあ」

トミヤマ 「あなたの話は雑音なんだ」

犬が吠えるような演奏。(M10)

サトウ 「雑音ねえ……そりゃいいや。で、どうするんです？雑音を消すために、音楽で耳栓して、ネコの額より狭い画面を通して世界と繋がるってわけ？安全だなあ。でも、それじゃ根本的な解決になりませんよ」

トミヤマ 「好きなように言えばいい」

演奏が大きくなる。(M10)

サトウ 「吠えてますねえ。トミヤマさん以上の吠えっぷりだな」

トミヤマ 「……」

サトウ 「雑音をシャットアウトする方法を教えてください」

サトウ、ピアノに近づく。

演奏さらに大きくなる。(M10)

サトウ、ピアノの低音部分を強く押さえる。

同時に演奏がカットアウトされる。(M10)

トミヤマ、不安に襲われる。

サトウ、イスに戻ってくる。

サトウ 「ね、簡単でしょ。雑音をシャットアウトするには、音源をなくしちゃえばいい」

トミヤマ 「……」

サトウ 「本当に簡単なんですよ。鼻っ先にジャケットでもなんでも巻きつけた片腕を突き出して、それに飛びかかせておいてグイッと犬の体を持ち上げ、反対の手に握ったナイフで喉を掻き切る。それだけ」

トミヤマ 「……」

サトウ 「破れちゃったかな？犬のヤツに噛ませたから……もし気になるなら買い取りますよ。サイズもびったりだったし、少しぐらい破れても私にはちょうどいい、でしょ？」

トミヤマ 「返してください」

サトウ 「これがそんなに大事なの？高級ブランドでもないし……ああ、わかった、奥さんに怒られるんだ。誕生日のプレゼントですもんね」

トミヤマ 「返してください……」

サトウ 「奥さん、そんなに恐いんですか？養ってるのトミヤマさんなんでしょ？もつと堂々としてればいいのに。そうじゃないからつけ上がるんですよ。生意気盛りの娘なんて、鉄拳制裁してやればいいんですよ」

トミヤマ 「返せ……」

サトウ 「え？」

トミヤマ 「返してください」

サトウ 「やだ」

トミヤマ 「なんだって？」

サトウ 「イヤだ、と言ったんですよ。返してほしければ、自分の力で取り戻せばいい」

トミヤマ 「どうかしてる」

サトウ 「どうかしてるのはトミヤマさんのほうでしょ」

トミヤマ 「なんだと？」

サトウ 「自分で買った家から居場所を奪われて、この憩いの部屋からも追い出され、大好きなジャケットまで私に奪われようとしているんですよ」

トミヤマ 「……」

サトウ 「なんでも言いなり。まるで飼いなされた家畜だな、家畜」

トミヤマ 「黙れ……」

サトウ 「ああ、そうか、だからストレス解消にギンズバークを暗唱してるんだ。ギンズバークはあんたとちがって本物のケモノだからな。自分が牙を抜かれた家畜なもんだから、ギンズバークの力を借りて吠えてたつてわけか」

トミヤマ 「……」

サトウ 「安全だなあ、とことん安全。でもそれで生きてるって感じられるの？」

トミヤマ 「もう本当に帰ります……そのジャケットは差し上げますから」

サトウ 「逃げるんだ」

トミヤマ 「なんとも言えない。でも、ぼくはトラブルに巻き込まれるのはお断りだ。あなたが何をしたいのかは知らないけど、関わりになりたくない。それに、犬に噛まれたジャケットなんて、ぼくには着れませんから。また新しいのを買います」

サトウ 「プライドはないんですか？ほんとにジャケットはいらないの？」

トミヤマ 「どうぞ、気に入ったなら着てください。もちろん、捨ててもかまいませんから」

サトウ 「あんまりガツカリさせないでくださいよ」

トミヤマ 「ご期待に応えられなくてすみません。では」

ヒアニストによるアクセント。

(サトウ、トミヤマを蹴り倒す。)

サトウ 「まったく情けねえなあ。まだ、どうすればいいかわかんないのかよ？」

ヒアニストによるアクセント。

(サトウ、ナイフを出す。)

トミヤマ 「だれかあ！だれかあ！だれかいませんかあ！」

サトウ 「誰もいないよ。いたとしても関わりになろうなんて思うヤツはいないさ。もし、あんた
だったらそうだろ？誰かが誰かに殺されかかってたって、自分が危ない目に遭うくらい
なら知らん顔だよ」

トミヤマ 「……」

サトウ 「あんた、今、どんだけ間抜けだかわかるか？ここにはオレとあんたの二人しかいないん
だ。誰も助けちゃくれないんだよ。さあ、どうする？」

トミヤマ 「……」

サトウ 「トミヤマさん、オレは本気なんですよ。オレを止めてくれませんか？」

トミヤマ 「……でも……あんたはナイフを持つてる……」

サトウ 「年長者にあんたなんて言うなよ。さっきも注意したぞ」

トミヤマ 「……たすけて……」

サトウ 「……オレの言うとおりに繰り返すんだ」

トミヤマ 「……」

サトウ 「ぼくを……」

トミヤマ 「ぼくを……」

サトウ 「殺して……」

トミヤマ 「殺して……」

サトウ 「ください」

トミヤマ 「……」

サトウ 「殺して、ください。さあ言うんだ」

トミヤマ 「殺して……いやだ！」

ノイズが大音量で響き渡る。

同時に、ピアノの演奏。(M11)

(*参考…トニー滝谷／坂本龍一、『100歳の少年と12通の手紙』／前嶋康

明)

(トミヤマ、サトウの腕をつかみナイフを奪おうとする。)

(二人とも、床に倒れる。)

(サトウ、ゆっくりと立ち上がり、ナイフをトミヤマの足下に投げる。)

(トミヤマ、ナイフを凝視している。)

(サトウ、トミヤマに近づき、尻の辺りを蹴り始める。)

サトウ 「拾えよ（足を踏み鳴らす）」
トミヤマ 「……………」
サトウ 「拾えよ（足を踏み鳴らす）」
トミヤマ 「……………」
サトウ 「拾えよ（足を踏み鳴らす）」
トミヤマ 「……………」
サトウ 「拾えよ（足を踏み鳴らす）」
トミヤマ 「……………」

る。）
（サトウ、這って逃げるトミヤマを追い回し、徐々に声を荒げ、蹴りも強くな

サトウ 「拾え（足を踏み鳴らす）」
トミヤマ 「……………」
サトウ 「拾え（足を踏み鳴らす）」
トミヤマ 「……………」
サトウ 「拾え（足を踏み鳴らす）」
トミヤマ 「……………」
サトウ 「拾え（足を踏み鳴らす）」
トミヤマ 「……………」
サトウ 「拾え（足を踏み鳴らす）」
トミヤマ 「……………」
サトウ 「拾え！（足を踏み鳴らす）」

（突然、トミヤマがナイフを拾う。）
ノイズと演奏がやむ。（M11）
間。

トミヤマ 「考え直すなら今だぞ！今すぐ……………」

（時間が再び急激に動き出す。）
（サトウ、トミヤマに突進して、ナイフ目がけて抱きつく。）
ノイズの嵐。

暗転。

サトウ、去る。

#エピローグ

ピアノスト、「ウエアハウスのテーマ」を演奏（Z12 || M1）する。

#プロローグと同じ日。

トミヤマ、『エドワード・オールビー全集』第二巻を持って、『動物園物語』の続きを読む。

トミヤマ 「イヌ。一匹の犬……犬が一番だ。一匹の犬。これこそまさに賢明の策と思われた。だって、人間は犬の最良の友というじゃないですか。てなわけで、その犬とぼくとは互いに顔と顔を見かわした。ぼくの方が長くね。それで、それ以来、ぼくの見たものは変わっていない。いつ顔を合わせようと、ぼくらは足を止めて、悲しみと疑惑の入り交じった目つきで見つめ合う。それから互いに無関心を装って別れる。何事もなくすれちがう。ぼくらには理解があるんだ。すごく悲しいことだけど、それを一つの理解だと認めないわけにはいかないだろう。なんとかして互いにかかり合いたいという努力はいつも失敗したんだからな。こうして犬は残飯あきりに戻っていったし、ぼくはぼくで、孤独ながら自由な通路へと。いや、ぼくは戻ったんじゃないよ、孤独にして自由な通路を勝ち取ったと言うべきだ。もつともそこまで失ったことがはたして勝利と言えるかどうかは疑問だがね。とにかくよくにわかったのは、愛情も残酷さも、それぞれがバラバラに独立しているかぎり、それ以上の結果は生み出さない、しかしだ、愛情と残酷さ、その二つが結合したとき、同時に一つの行為に表れるとき、その熱情がはじめて人を動かすってことだ。結局勝ちえたものは実は失ったものなんだな。その結果はどうなった、犬とぼくとは妥協をしただけだ、ただの取引きさ。ぼくらは愛してもせず、傷つけもせず、互いに相手の心にふれようとはしない。じっさいね、犬に肉を食べさせようとした行為は、果たして愛の行為だったんだろうか？ ことによると、あの犬がぼくにかみつこうとした行為こそ愛の行為だったんじゃないかな？ われわれがのべつこんなふうに誤解ばかりしているんだとしたら、そもそももいったいなんで愛なんて言葉を発明したんだろう？」

日常音（ノイズ）が流れ込んでくる。

トミヤマ 「It's very hot today , isn't it ?

……

It's very hot today , isn't it ?

……

It's very hot today , isn't it ?」

ノイズが大きくなって、すべての音をかき消す。
ブラックアウト。

鈴木勝秀 (suzukatz.)

.....
[以上]